

国際協力NGOの開発教育に果たす役割と可能性 ～フォスター・プランの子ども参加プログラムからの一考察～

奈良崎 文乃

研究の目的と方法：

本研究の目的は、国際協力NGOがこれからの開発教育に果たす役割と可能性を考察することである。

この数年は「開発」現場をもつ国際協力NGOと、「教育」現場である学校とのつながりが実践的に構築されてきた時期であると認識している。しかし、そのつながりの中で、「開発」現場での実践が、開発教育にタイムリーに反映されているかを考えた時、開発現場のダイナミックな変化への呼応は未だ充分とは言えないだろう。例えば、開発教育プログラムの核である「開発」の意味合いが、依然「経済」中心の「開発」の捉え方に留まっていることがある。また、国際協力NGOの開発現場が、外部者による「慈善型開発・援助」から、住民主体による「参加型開発」に推移してきているにも関わらず、発信する開発教育のメッセージが、援助を求める「慈善型」に落ちついてしまっていることもある。そして開発教育の場で発せられる「不公正な世界や厳しい状況で暮らす人々の姿を知ってもらいたい」というメッセージが、受け手に悲惨な開発途上国・人々というイメージを強化・再生産する形で届いてしまったり、その逆に「開発途上国の人々は貧しくても肩を寄せ合いながら素朴に暮らしている」というメッセージが、神聖化した開発途上国像を醸成してしまうこともある。また、開発教育の中で国際協力NGOの活動を紹介する場合、自分たちがそれらの問題解決に多角的かつ専門的に取り組んでいることを強調することは、国際協力NGOが「専門家」、「活動の主体」であり、現地の人たちは単なる「受け手」なのだと思われ、受けとめられることにつながってしまうこともある。

筆者は国際協力NGOのスタッフとして開発教育に関わる中で、開発現場のダイナミックな変化や開発途上国の人々の「等身大」の姿、彼らが抱く「夢」、それを実現するための「主体的」な取り組みをもっとタイムリーに開発教育に伝えていかなければならないこと、さらにその役割は、開発現場でそれらを目の当たりにして活動する国際協力NGOこそが果たせるのではないか、ということを考えてきた。

このような問題意識に基づき、本研究では、国際協力NGOがこれまでの開発教育の歴史の中で、果たしてきた役割を整理し、現在の国際協力NGOの開発教育への取り組みを分析し、国際協力NGOが開発教育に果たす役割とその可能性を考察する。その考察にあたり、国際協力NGOのスタッフとして筆者が実践した、開発現場の学びを活かした開発教育プログラムの事例を採り上げ、検討する。その実践事例は、現在、開発の現場で注目されている、「子ども参加アプローチ」を日本の開発教育につなげたプログラムである。このプログラムは、子ども参加アプローチが、開発途上国の開発現場で今まさに実践されている「人間中心の開発」のプロセスであることに加え、子どもたちのエンパワメントを促し、大人のパートナーとして、より良い社会づくりに主体的に貢献する大きな力を育む可能性を有している点に注目していく。

本研究では、これらの考察を通じ、国際協力NGOがこれからの開発教育に果たしうる役割とその可能性を探ることで、開発教育の2つの現場である「開発」の現場と「教育」の現場がより有機的につながった開発教育の実現への一助としたい。

論文の構成：

- 序章 課題意識**
- 第1節 研究の背景
- 第2節 研究の目的と意義
- 第3節 研究の範囲と方法
 - ・ 開発教育の定義
 - ・ 国際協力NGOの定義
 - ・ 研究の方法
- 第4節 本論文の構成

- 第1章 開発教育と国際協力 NGO**
- 第1節 開発教育における国際協力 NGO の役割
 - ・ 日本における開発教育の歴史
 - ・ 開発教育の概念の進展
 - ・ 開発教育における日本の国際協力NGOの関わり
- 第2節 国際協力 NGO の開発教育
 - ・ 開発教育に取り組むNGO数の推移
 - ・ 開始時期
 - ・ 分野
 - ・ テーマ
 - ・ 活動内容
 - ・ 目的
 - ・ 課題
- 第3節 小括

- 第2章 開発現場の学びを活かした開発教育プログラムの試み**
- 第1節 フォスター・プランの開発教育の変遷
 - ・ フォスター・プランの目的
 - ・ 使命
 - ・ 活動方針
 - ・ 歴史
 - ・ 活動の特色
- 第2節 フォスター・プランの子ども参加プログラム
 - ・ フォスター・プランと子ども参加
 - ・ プログラム事例（バングラデシュ、ケニア）
- 第3節 「子ども参加」を採り入れた開発教育プログラム
～フォスター・プラン日本事務局の「こいのぼりプログラム」～
 - ・ 背景と目的
 - ・ 経緯
 - ・ ケニアの「こいのぼり」日本の「こいのぼり」
 - ・ 子どもたちの気づきとメッセージ
 - ・ プログラムの評価
- 第4節 小括

- 第3章 国際協力 NGO の開発教育に果たす役割と可能性**
- 第1節 国際協力 NGO の開発教育に果たす役割
- 第2節 国際協力 NGO の開発教育に果たす可能性

結論

添付資料 ケニアのこいのぼり、同志社中学校のこいのぼり

謝辞

参考文献

論文の概要：

本論文は、開発現場をもつ国際協力NGOが、その専門性を活かし、開発教育でどのような役割を担っていくべきかを探ったものである。

第1章の第1節では、日本における開発教育の歴史を振り返りつつ、その主題が「貧しくて気の毒な人々を助けてあげよう」といったチャリティの促進から、開発途上国の貧困の一因は経済先進国側にもあるとする世界経済の構造的な批判に、そしてその後も「開発」の概念の変化に伴い、「グローバリゼーション」「持続可能な開発」などの概念に影響を受けながら、多様化してきたことを述べた。また、開発教育における国際協力NGOの関わりは、日本への導入当初は「当事者」であり、その後も「リソース」として重要な役割を担ってきたこと、とりわけ現在、国際協力NGOの専門性への期待が高まっていることを概観した。

第1章の第2節では、国際協力NGOの開発教育の実態とその傾向を、「開発教育に取り組むNGO数の推移」「開始時期」「分野・テーマ」「活動内容」「活動目的」「課題」の側面から分析した。その中で、1990年から2000年の10年間で、開発教育に取り組む国際協力NGOの数が倍増し、「国際協力」「第三世界の子どもや教育」などのテーマを中心に、セミナー、資料作成、講師派遣、スタディツアーなど、多様な形で開発教育を展開していること、さらに、国際協力NGOの開発教育が、人材や資金の不足といった中で、位置づけ、目的、内容、体制などにおいて、広報と混合した形であることを明らかにした。また、「総合的な学習の時間」など、社会から国際協力NGOの開発教育に寄せられる期待も増し、国際協力NGOの開発教育もそれに応じる形で、新たな展開が求められていることを述べた。

第1章の第3節では、国際協力NGOの開発教育が広報と混合する背景として、Steven H. Arnoldが、1988年にイギリスの国際協力NGOを対象に行った指摘が、現在の日本の国際協力NGOにも重なることに言及した。それは、国際協力NGOが開発教育を実施する際、悲惨さを強調することで、支援を獲得するチャリティ・ビジョンを志向する広報担当者と、団体への支援獲得という目的とは距離を置いた開発教育を目指す開発教育担当者とのビジョンをめぐるジレンマが存在するという指摘である。また、国際協力NGOの強い使命感が空回りし、学習者が開発途上国に対するステレオタイプなイメージを抱いてしまったり、悲惨さに身を引いてしまったりすることがある問題点を挙げた。そして、開発途上国の人々の「等身大」の姿、彼らが抱く「ビジョン」、彼らの「主体的」な取り組みを伝えていく、という国際協力NGOこそが開発教育に果たしうる役割が、十分に果たされていないという課題を提起した。

第2章の第1節では、事例研究の実施NGO、フォスター・プランの活動の変遷を整理した。そして、開発教育が団体の目的や活動と密接に関わること、漸く2003年になって、開発教育が組織の重点取り組みの一つとして位置づけられ、世界各国で積極的に展開されるようになったことを概観した。

第2章の第2節では、フォスター・プランの子どもを中心に据えた活動が、「フォスター・プランによる子どものための活動」から、「フォスター・プランとコミュニティの大人による『子どものための活動』」へ、そして、子ども・コミュニティの大人が主体的に参加する「子どもとともにすすめる活動」へと変遷してきたことを概観した。さらに、「子どもとともにすすめる地域開発」においては、「子ども参加」が重要な側面であることを述べ、バングラデシュの「保健

衛生改善プロジェクト」とケニアの「子どもビデオプロジェクト」を具体例として紹介した。

第2章の第3節では、開発現場の「子ども参加」の学びを活かした開発教育プログラムの実践事例として、フォスター・プラン日本事務局が実施した「こいのぼりプログラム」を検証した。このプログラムは、広報と明確に区別されたこと、「単発のイベント」ではない「継続した学びのプロセス」を意識して企画されたこと、「子ども参加のアプローチ」を採用して「今の等身大の姿から学びあう」ことに焦点を当て、「未来」に注目したことを特徴としていた。プログラムが進むにつれ、参加したケニアと日本の子どもたちは、第一に、自分たちの村・まちの現実を改めて見つめ、客観的に捉えていったこと、第二に、自分たちの理想を明確化し、その実現のためには何ができるかを考えていったこと、第三に、ケニアと日本の双方の子どもたちが互いの描いた「こいのぼり」を学びあうことで、等身大の姿を知ることができたこと、第四に、より良い地球社会について考えを広げていったことが変化としてみられた。このプログラムは、子どもたちが、自分の生活と世界のつながりに気づき、自分たちの生活や社会に変化をもたらす力を自分たち自身が有していることを確信していく契機となった。

第2章の第4節では、「子ども参加」概念の生まれた背景を整理し、代表的な先行研究であるR.ハートの「参加のはしご」を紹介した。そして、開発途上国の子どもの支援活動において子どもを援助や保護の「対象」としか捉えてこなかった国際協力NGOが「子ども参加」に注目し、子どもの声にも耳を傾け、子どもを「主体」とし、子どものエンパワーメントを引き出すプログラムの実践を始めたことを述べた。日本においても、「子ども参加」の学びを開発教育につながる動きも近年みられ、「こいのぼりプログラム」がその潮流の中で実践されたことを示した。

第3章の第1節では、国際協力NGOが開発教育に果たす役割として、「開発現場のアプローチとその背後にある考えをタイムリーに日本の開発教育につなげていく」ことを提起した。そして、国際協力NGOと開発教育の当事者が、その役割をより意識しながら開発教育に取り組んでいくことが重要であることを指摘した。さらに、第2節では、「開発現場のアプローチとその背後にある考えをタイムリーに日本の開発教育につなげていく」という役割を果たすことで、国際協力NGOの開発教育が、第一に、開発現場での活動の「現在」を伝えるものになること、第二に、開発途上国の現状や人々の「等身大」の姿を伝えるものになること、第三に、国際協力自身がその活動を省み、開発教育をより意識する契機になること、第四に「当事者意識」を伴った開発教育の学びを創ること、の四つの可能性を掲げた。そして、これらを通じて、グローバルな課題をローカルに引き寄せ、ローカルな課題を基点にグローバルを発想する地球市民を育むことに国際協力NGOが貢献できることを主張した。

本論文は、国際協力NGOのスタッフとして開発教育に関わってきた筆者の12年間の経験に基づいた考察である。転換期にある開発教育への問題意識、そして国際協力NGOの開発教育が抱えるジレンマをいかに乗り越えていけるかを、当事者そして実践者の視点から探った。国際協力NGOの組織論やマネジメント論の観点や、教育学的な観点からも、今後さらに研究を重ねていきたい。